

# カミュと「読書サロン」

## —「地中海」文化の創造—

内田 涼太郎

### 1. はじめに

アルベール・カミュ Albert Camus (1913-1960) は、ヒューマニズムの作家として知られているが、彼はフランス植民地時代のアルジェリア出身の作家でもあり、アルジェリアに関する著作も残している。とりわけ、アルジェリアの貧窮問題を考えた彼は、アルジェリアの原住民の権利拡大のためにさまざまな活動をした。その一つが、彼が記者として携わった『アルジェ・レピュブリカン』紙での記事である。ここで、カミュは政治的な記事を書く一方、文化活動を推進する目的で1938年10月9日から1939年7月24日まで文芸欄である「読書サロン」という一連の記事を書いている。

カミュの研究において小説作品は多く考察されているが、カミュがアルジェリアにいた頃にかけていた評論などの著作に関する研究はまだ十分に行われていないところがある。とりわけ『アルジェ・レピュブリカン』紙については、伝記研究では簡単に検討されているが、その思想性について論じた研究は少ない。1930年代のカミュの著作には、彼が「地中海」をどのような文化を持つ場所と考えていたかが記されており、こうした彼の「地中海」観と『アルジェ・レピュブリカン』紙の記事には何らかの関係が見られるはずである。本論では、初期のカミュが「地中海」文化に関して述べていた言説を整理した後、『アルジェ・レピュブリカン』紙がどのように発刊されたのか、その経緯を辿り、またカミュが書いた文芸欄の「読書サロン」の記事を具体的に分析し、カミュが『アルジェ・レピュブリカン』紙に対しどのような考えをもちながら活動に加わっていたかを考察する。その作業を通じて、カミュが地中海の民族や文化をどのようなものとして捉えていたか、カミュの思想と比較しつつ考察する。

### 2. カミュの「地中海」文化観

カミュは1930年に書いた「詩」«Poème»<sup>1</sup>で、地中海への称賛を表しており、エ

ッセイの作品である1937年の『裏と表』、1939年の『結婚』でもアルジェリアへの郷土愛が表わされているが、カミュの地中海の文化の在り方について最も詳しく述べたものは、1937年の「土着の文化、新しい地中海文化」*«La Culture indigène, La Nouvelle Culture méditerranéenne»*と題された「文化の家」<sup>2</sup>の開会演説や、同年の「ヴィオレット計画のためのアルジェリア知識人のマニフェスト」*«Manifeste des intellectuels d'Algérie en faveur du projet violette»*や、1938年のアルジェ派の雑誌『海辺の国』*Rivages*の第1号に寄せられた言葉などである。

「土着の文化、新しい地中海文化」では、地中海の文化について次のように述べている。

Bassin international traversé par tous les courants, la Méditerranée est de tous les pays le seul peut-être qui rejoigne les grandes pensées orientales. Car elle n'est pas classique et ordonnée, elle est diffuse et turbulente, comme ces quartiers arabes ou ces ports de Gênes et de Tunisie. Ce goût triomphant de la vie, ce sens de l'écrasement et de l'ennui, les places désertes à midi en Espagne, la sieste, voilà la vraie Méditerranée et c'est de l'Orient qu'elle se rapproche. Non de l'Occident latin. L'Afrique du Nord est un des seuls pays où l'Orient et l'Occident cohabitent. Et à ce confluent il n'y a pas de différence entre la façon dont vit un Espagnol ou un Italien des quais d'Alger, et les Arabes qui les entourent. Ce qu'il y a de plus essentiel dans le génie méditerranéen jaillit peut-être de cette rencontre unique dans l'histoire et la géographie née entre l'Orient et l'Occident.<sup>3</sup>

あらゆる流れが通過する国際的な水域である地中海は、あらゆる地方の中で、東洋の偉大な思想に接合するおそらくただ一つの地方なのです。なぜなら、地中海は古典的でもなければ、秩序立っているわけでもなく、散り散りで、波乱万丈で、まるでアラブ人の街かジェノワやチュニジアの港のようです。人生の勝ち誇った味わい、圧倒されたり退屈したりする感覚、スペインの正午の閑散とした広場、昼寝、そういったところにこそ真の地中海があり、その地中海が接近していくのは東洋なのです。それはあのラテン的西洋ではありません。北アフリカは東洋と西洋が共存している数少ない地方の一つです。この合流点には、アルジェの波止場のスペイン人や、イタリア人の生き方と、彼らを取りまいているアラブ人とのあいだに、何の差異もありません。地中海的天分のなかにある最も本質的なものが、東洋と西洋のあいだに生れた地理上や歴史上のこのかけがえのない邂逅から、おそらくはほとぼしっているのです。

ここでは、地中海を東洋と西洋が共存するところと捉えていることが分かる。重要なことは、東洋や西洋の文化がそれぞれの形で共存していることであり、混合していることではないのである。1900年代から植民地アルジェリアではロベール・ランドーらを中心に「アルジェリアニズム」という文化運動が起こったが、そこでの理想は人種の混合と本国からの政治的な分離であった<sup>4</sup>。しかし、カミュの理想はその住民の諸文化が混じり合うのではなく、それぞれの文化を尊重することだと言えるだろう。「地中海」を新しい文化が生まれ出すという場ではなく、さまざまな文化が交流する遭遇の場として彼は考えているのである。

カミュが編集に携わっていた「アルジェ派」<sup>5</sup>の雑誌の『海辺の国』にもその思想は表れている。

Les esprits les plus divers, grands écrivains et inconnus d'hier, trouveront un terrain de rencontre ; grâce à de nombreuses traductions, des textes vivants (espagnols, italiens, arabes), retrouveront leur jeunesse. Notre seule exigence sera celle de la qualité : qualité de la forme et de la pensée, barbarie harmonieuse et ordonnée sans laquelle rien de vivant ne se trouve être communicable.<sup>6</sup>

多様な精神達、偉大な作家や、昨日まで知られていなかった作家が、遭遇する場を見つけるであろう。それは、多くの翻訳によってであり、生き生きとしたテキスト（スペイン語、イタリア語、アラビア語のもの）が、彼らの若々しさを再発見するのである。我々の唯一の要請は価値の要請である。形態や思想の価値、言いかえれば調和にみちた秩序ある野蛮であり、それがあってこそ生きているものが意思疎通できるような野蛮なのである。

ここでも「地中海」をさまざまな文化が遭遇する場として捉えており、その遭遇により、お互いの文化がそれぞれ学び合うことを期待していると言えるだろう。カミュは「地中海」の歴史ではなく、現在を重視しており、「地中海」を動的でこれから変化していく文化集合体として捉えていると言えるだろう。

しかし、このように「地中海」の文化的背景の特権性を説明しつつも、カミュはそうした地中海の在り方を文化の好ましい在り方として一般化しているともいえる。カミュが価値を置くのは「生きているもの」(vivant)であり、曖昧であるが、この考え自体は「地中海」の場によらないものではないだろうか。カミュは人類に共通するような普遍的な問題についても考察しているようである。

カミュの初期の「地中海」観に関しては、普遍的な価値と地域的な価値の関係をどのように捉えているのか考察することが重要である。以下、『アルジェ・レピュ

ブリカン』紙に掲載された「読書サロン」の記事に述べられているカミュの「地中海」観について、具体的に考察したい。

### 3. 『アルジェ・レピュブリカン』紙の創刊の経緯とその狙い

『アルジェ・レピュブリカン』紙の発行の経緯に関しては、アルベール・カミュのプレイヤード新版の解説や、ギョーム・レズネの論文<sup>7</sup>に詳しく書かれている。また、日本語の文献としては高島正明『若き日のカミュ』にもいくつか『アルジェ・レピュブリカン』関する記述が見られる。本節ではそれらの記述を参照し、『アルジェ・レピュブリカン』紙の発刊までの略史と目的や傾向についてまとめる。

『アルジェ・レピュブリカン』紙は1938年10月6日に日刊紙として発刊された。ヨーロッパ人と現地人の共存を創り出すことが一つの目標であった。<sup>8</sup>

その『アルジェ・レピュブリカン』紙の一つの課題は財政面での自立であった。1938年10月6日の第一号では、「読者へ」とタイトルがついたAbbas Turqui, Lechami Mohamed, Makaciの三人の署名が入った記事において、財政的に自立をすることで、大企業など一部のための新聞であるのではなく、「アルジェリア」の新聞になることが目標となっている。

Après Oran, Alger a son journal républicain. Nos amis de Constantine préparent le leur. Pour la première fois une presse absolument indépendante va soutenir en Algérie la cause de la démocratie qui est celle de la justice et de la paix.<sup>9</sup>

オランに続いて、アルジェでも共和主義の新聞ができた。コンスタンティーンの我々の友も、そのような新聞を準備しているところだ。初めて完全に独立した出版物が、アルジェリアの中で正義と平和のための民主主義の大義を支えるものとなるだろう。

「完全に独立した」という記述は『アルジェ・レピュブリカン』が財政的に自立した新聞を目指していたことと重なっている。こうした財政の自立を目指すために『アルジェ・レピュブリカン』の会社体制においては、いかなる取締役も、代議士、上院議員もしくは財務理事を兼ねることを禁じられていた。『アルジェ・レピュブリカン』紙は清廉潔白をうたい、官公庁、政治、議員とのしがらみを拒んでいた。財政的な自立が、ある特定の集団などの意見に左右されない平等で公正な立場になると考えているようである。

また、10月6日の記事には、アルジェリアに住む人々を同じ「フランス人」とし

て扱おうとしていることが見てとれる。

Pour *Alger Républicain*, il ne saurait y avoir deux sortes de Français mais une seule qui englobe également le Parisien, indigène de Paris, le Marseillais, indigène de Marseille, et l'Arabe, indigène d'Algérie. C'est pourquoi nous réclamons l'égalité sociale immédiate de tous les Français quelle que soit leur origine, leur confession ou leur philosophie. C'est pourquoi nous réclamons l'acheminement des indigènes d'Algérie vers l'égalité politique.<sup>10</sup>

『アルジェ・レピュブリカン』にとって二種類のフランス人は存在しない。ただ、一つのフランス人があるだけであり、それはパリに生まれ育ったパリ人、マルセイユに生まれ育ったマルセイユ人、アルジェリアに生まれ育ったアラブ人を同等なものとして一つに包含したものである。それゆえに、我々はあらゆるフランス人の即時の社会的平等を要求するのである。その人の出自や信条や哲学がどのようなものであってもだ。また、それゆえに我々はアルジェリアに生まれ育った者が政治的平等へと向っていくことを要求するのである。

アラブ人を含めて「フランス人」と呼ぶことは、所謂「同化主義」の立場に立って、それぞれの民族の違いを無視し植民地主義を推し進めることになりかねないが、この出版部の意図としては同じ「フランス人」として民族の違いにより差別されることがなくなることを目指していたと言える。

『アルジェ・レピュブリカン』紙の紙面構成をみると、全体は8ページで、主要な政治社会問題が第1、2面を中心に上げられ、残りは文芸欄やその他の情報であった。その他の雑報の中で興味深い記事が、「ベルクールからバブ＝エル＝ウルドまで」や「沿岸からサハラまで」といった地方通信欄で、前者では主にアルジェリア在住フランス人の下層階級の日常生活や身辺の問題が、後者では主として、アルジェリア各地に散在する原住民の細かい問題がとりあげられていた。

#### 4. 「読書サロン」の目的と構成

次に、この『アルジェ・レピュブリカン』紙に掲載された「読書サロン」« Le salon de lecture »と名付けられた一連の記事がどのような特徴を持っていたかを考察する。「読書サロン」は、『アルジェ・レピュブリカン』紙に1938年10月9日から1939年7月24日まで断続的に文芸欄として掲載された一連の記事である。筆者が新聞を全て参照してはいないため、全体としてどのような記事であったかは判断できない

が、カミュが書いたものはプレイヤーード新版のカミュ全集でみることができる。カミュは主として書評を担当していたようだ<sup>11</sup>。

カミュは、この文芸欄が始まった1938年10月9日の記事で、「読書サロン」の目的を以下のように述べている。

Un journal qui se veut au service de la vérité la sert dans tous les domaines et ne saurait la négliger dans les œuvres de l'esprit. De tous les buts qu'une chronique littéraire peut se proposer, celui-ci est à la fois le plus modeste et le plus ambitieux.<sup>12</sup>

真実に貢献することを望む日刊紙というものは、あらゆる領域において真実に仕え、精神の産物としての作品においてもそれを無視しないだろう。この文芸欄が目標としうるあらゆる目的の中でもこの点こそが、最もつましくあると同時に野心的な目標である。

ここでは、作品が描き出す「真実」を求めることが理想として述べられている。また、プレイヤーード版の注を編集したアンドレ・アプーは、カミュが主観を排し、作品に忠実であることで真理に到達しようとする立場であったことを指摘している<sup>13</sup>。

次に、「読書サロン」ではどのような作品が取り上げられたのかについて以下に記述する。取り上げられた作品に関して作者、タイトル、作者の出身地、出版年に関して以下の表にまとめた<sup>14</sup>。

日付(1938～1939年)	作者	書名	作者の出身地	出版年
10月9日	オルダス・ハクスリー Aldous Huxley	『くだらない本』 <i>Marina di Vezza</i>	イギリス	1925
10月10日	エーリッヒ・マリア・レマルク Erich Maria Remarque	『三人の仲間』 <i>Les Camarades</i>	ドイツ	1937
10月11日	ブランシュ・バラン Blanche Balain	『日々の活力』 <i>La Sève des jours</i>	フランス	1938 頃?
10月20日	ジャン＝ポール・サルトル Jean-Paul Sartre	『嘔吐』 <i>La Nausée</i>	フランス	1938
10月28日	ジャン・イティエ Jean Hytier	『アンドレ・ジッド』 <i>André Gide</i>	フランス	1938
11月2日	ルネ・ジャンソン	『卑怯者たち』		1938

	René Janon	<i>Les Salopards</i>		
11月11日	ポール・ニザン Paul Nizan	『陰謀』 <i>La Conspiration</i>	フランス	1938
11月22日	エドモン・ブルア Edmond Brua	『ボーン人の寓話』 <i>Les Fables bônoises</i>		1938
11月28日		「詩」 <i>Poésie</i>		
11月28日		「雑誌アルジェリア」 <i>La Revue Algérienne</i>		
1月3日	ルノー・ド・ジュヴネル Renaud de Jouvenel	『共通の力』 <i>Commune mesure</i>	フランス	1938
1月3日	ジャン・ジョーノ Jean Giono	『貧困と平和に関する農民 への手紙』 <i>Lettre aux paysans sur la pauvreté et la paix</i>	フランス	1938
1月16日	フェリックス・ド・シャズルネ Félix de Chazournes	『カロリーン、あるいは 島への出発』 <i>Carolone ou le Départ pour les îles</i>	フランス	1938
1月21日	ガブリエル・オーディジオ Gabriel Audisio	『開いた鳥籠』 <i>La Cage Ouverte</i>	フランス	1938
	フランソワ・ベルトー Françoise Berthault	『ミュザレーヌの三つの小 話』 <i>Trois Contes de la Musaraigne</i>		1938
	クロード＝モーリス・ ロベール Claude-Maurice Robert	『オーレス山地のワジ (河の跡) に沿って』 <i>Le Long des Oueds de L'Aurès</i>		1938
1月28日	マリー・モーロン Marie Mauron	『モルティッソン街』 <i>Le Quartier Mortisson</i>	フランス	1938
2月5日	アンリ・ド・モンテルラン Henry de Montherlant	『九月の秋分点』 <i>L'Équinoxe de septembre</i>	フランス	1938
2月18日	アメリア・イアハート Amelia Earhardt	『最後の飛行』 <i>Dernier Vol</i>	アメリカ	1937

	エレヌ・イスヴォルスキ Hélène Isvolski	『ソビエトの女』 <i>Femmes Soviétiques</i>		
3月5日	アルマン・ギベール Armand Guibert	『チュニジアの島めぐり』 <i>Pèriple des îles tunisiennes</i>	チュニジア	1939
	アブド・エッラーマン・ ベン・エル＝ハッフアフ Abd-Errahman Ben el-Haffaf	『イスラーム研究への導き』 <i>Introduction à L'étude de l'Islam</i>	アルジェリア	1921
	エメ・デュピュイ Aimé Dupuy	『内陸から沿岸に』 <i>Du Bled à la Côte</i>		
3月12日	ジャン＝ポール・サルトル Jean-Paul Sartre	『壁』 <i>Le Mur</i>	フランス	1939
3月28日	フェレイロ・ド・カストロ Ferreiro de Castro	『処女の森』 <i>Forêt vierge</i>	ポルトガル	1921
3月28日	アンリ＝ポール・エイドゥー Henri-Paul Eydoux	『サハラ砂漠の探検』 <i>L'Exploration du Sahara</i>	フランス	1938
4月9日	ジョルジェ・アマード Jorge Amado	『諸聖人のバヒア』 <i>Bahia de tous les saints</i>	ブラジル	1938
4月16日	ガブリエル・サン＝ジョルジュ Gabriel Saint-Georges	『アランガ』 <i>Aranga</i>		1939
	オスカール＝ポール・ジルベルト O.P.Gilbert(Oscal-Paul Gilbert)	『鉱山のボーダン』 <i>Bauduin des Mines</i>	ベルギー	
	ジョルジュ・シムノン Georges Simenon	『クルール家にて』 <i>Chez Krull</i>	ベルギー	1939
4月23日	P・H・ミシエル P.-H.Michel	『バラの小瓶』 <i>Le Pot aux roses</i>		1939
	ギー・マズリン Guy Mazeline	『自身の愛』 <i>L'Amour de soi-même</i>	フランス	1939
	ジャック・バイフ Jacques Baif	『細工された船』 <i>Les Navires truqués</i>	フランス	1939
5月23日	イグナーツィオ・シローネ Ignazio Silone	『パンと葡萄酒』 <i>Le Pain et le Vin</i>	イタリア	1937
	アンドレ・シャムソン André Chamson	『ガレー船』 <i>La Galère</i>	フランス	1939



5月23日	ミシェル・オダン Michel Hodent	『人の不幸を餌にする者たち』 <i>Des Charognards sur un homme</i>		
6月25日	ニコラス・ベルジャーエフ Nicolas Berdiaeff	『コンスタンティン・レオンティエフ』 <i>Constantin Léontieff</i>	ロシア	1938
	E・ヴェルメイユ E.Vermeil	『ヘンリ・ハイネ』 <i>Henri Heine</i>	フランス	1939
	A.M.プチジャン A.M.Petitjean	『スウィフトへの導き』 <i>Introduction à Swift</i>		1939
7月4日	ジョルジュ・ベルナノス Georges Bernanos	『真実のスキャンダル』 <i>Scandale de la vérité</i>	フランス	
	アルベール・オリヴィエ Albert Olliver	『コミューン』 <i>La Commune</i>	フランス	1939
		『新しいノート』 <i>Les Nouveaux Cahiers</i>		1939
7月15日	アルマン・ギベーヌ	『飼いならされた鳥』 <i>Oiseau Privée</i>	チュニジア	1939
7月24日		『アンダルシアの民衆詩』 <i>Coplas Populaires Andalouses</i>		1939
	ジャン・ラヴェルニュ Jean Lavergne	『クインタ・プグネータ』 <i>Quinta Pugneta</i>		1939
	A・L・ベルニョ A.-L.Berugnot	『ケブール』 <i>Keboul</i>		1939

取り上げた作品の作家の出身地を見ると、フランスが多いとはいえ、イギリス、ドイツ、アメリカ、ブラジル、ロシアなど別の国の作家も交っている。カミュは「地中海」の文化を様々な文化が共存する場として考えていたが、まさしく「読書サロン」の記事そのものが文化の多様性を表わすような著作の選択を行っていると言えるだろう。有名な作家の批評もあるのだが、それと同量かそれ以上にマイナーな作家も扱っており、「周辺」の作家を積極的に取り上げようとしていることがわかる。また、取り上げた作品は同時代のものが多く、「地中海」や世界のアクチュ

アルな文化を「読書サロン」で描き出そうとしたと考えられるだろう。

本論では、こうした読書サロンの記事の中から1938年11月22日に書かれたエドモン・ブルアの『ボーン人の寓話』とアルマン・ギベーヌの『飼いならされた鳥』に関する記事を中心に、カミュが「地中海」あるいは植民地アルジェリアの文化をどのように考えていたか考察する。

## 5. 「新しい文学」の創造—『ボーン人の寓話』に関するカミュの批評から

エドモン・ブルアは1901年に生まれ、1977年に亡くなっている。父はアルザス人、母はコルシカ人で、その間に生まれた彼はアルジェリアに仕事などの都合で訪れており、滞在経験もあった。

『ボーン人の寓話』は1938年に書かれたものでラ・フォンテーヌの文体や、アルジェリアニズムの作家であるミュゼットMusetteが『カガイユー』Cagayousで用いることで使われ始めたパタウエート (pataouète) と呼ばれる言語を使用した。フランス語やスペイン語やイタリア語やアラビア語が混じっており、オック系のフランス語が支配していた地中海の港湾都市では使われていた「共通語 (リング・フランカ)」とは異なるものである<sup>15</sup>。

この作品に関してカミュが書いた記事の中では「トルコ人と物知りの人」« Les turcs & Le savant »と「死とボーン人」« La mort & Le Bonois »という2つの断章について言及しているが、これらは全てで32の断章がある『ボーン人の寓話』の始めの2つの断章である。

ブルアの特徴的な文体をしてみるために、「トルコ人と物知りの人」から少し引用する。この話は、二人のトルコ人の少年、サルバートルとバグールが遊んでいたところに、その遊びを珍しがった「物知りの人」Savantが、二人を見て、いろいろメモに記録をとっていたところ、お金を落としてしまい、二人に取られてしまうという話である。

Tandis qu'il faut ces commentaires,  
Un écu de sa bourse échappe et tombe à terre.  
Salvator de dire : O Bagur !  
A de bon, cet homme il est guitche.  
Tu vas, tu mets le pied dessus,  
Presonne il a rien vu. T't-à-heure, on fait des mitches.<sup>16</sup>  
彼がこうしたコメントをしている一方で、

財布から金貨が逃れでて、地面に落ちた。

サルバトールは言った。おお、バグールよ。

運がいいことに、あいつはまだ見てないぜ。

お前、ちょっと言ってこいよ。足を上にのせてさ。

誰も、やつも、気づいてないぞ。あとで半分こにしようぜ。

この文章の特徴はguitcheやmitchesといった独自の言葉である。カミュはこうした新しい言葉遣いを一般に称賛している。

À ce peuple neuf dont personne encore n'a tenté la psychologie (sinon peut-être Montherlant dans ses *Images d'Alger*), il faut une langue neuve et une littérature neuve. Il a forgé la première pour son usage personnel.<sup>17</sup>

この新しい人々は誰も未だその心性を分析しようと努めていないものだが（おそらくモンテルランが『アルジェのイメージ』という作品の中でやっているのを別にすれば）、こうした人々にとっては新しい言語と新しい文学が必要である。彼は初めて個人的な使用のために（文学の）精錬を行ったのである。

カミュはここで「新しい言語」と「新しい文学」の創造がアルジェリアの人々にとって必要であり、ブルアはそのような仕事をしていると評価している。しかし、ブルアが行ったことは、ラ・フォンテーヌやミュゼットといった過去の作家の作風を取り入れて発展させたことであるともいえる。カミュの言う「新しさ」とは何に対する新しさなのだろうか。本国のフランスの文化と比べた時の新しさなのか、人類の文化の全体にとって新しいのか、そこははっきりとはわからない。

しかし、カミュは単に古い文化を全否定していないところに注意したい。カミュの論を引用する。

Et s'il me paraît que ces fables dépassent les limites du pittoresque et du folklore c'est qu'à tout prendre, elles restituent une des plus vieilles et des plus jeunes traditions de la poésie populaire : celle grâce à quoi la poésie était chose qu'on récitait et qui courait parmi le peuple qui l'avait inspirée.<sup>18</sup>

そして、これらの寓話が絵画的なものや、民俗学的なものもつ限界を超えているように私に思われるのは、つまるところこれらが民衆詩の最も古い伝統と最も新しい伝統の一つを復元しているからである。すなわちこれは、詩が誦まれることを可能にし、もともと詩を着想した源である民衆の間に詩が広まる

ことを可能にする伝統である。

先ほど引用したブルアの文章は、「新しい言葉」を使いつつも1、2行目、3、5行目、4、6行目がそれぞれ韻を踏むなど詩の基本的な技法である音韻を使っており、現代的な散文詩の形式を用いずに、伝統に則った形で作っている。また、民衆の間で語られているような物語を伝えるという民俗学的な価値をもった形式にもカミュは着目していると思われる（もちろん、『ポーン人の寓話』は創作作品であるのだが）。カミュはブルアの作品が現在と過去のもの融合したようなものを創り出しており、そこに「地中海」の価値があると考えている。ここでは、カミュの古いものと新しいものが融合していることに価値をおいている点に着目したい。

## 6. 時間と空間の超越と現在性—アルマン・ギベール『飼いならされた鳥』に関する記事から

アルマン・ギベールは1906年にアルジェに生まれ<sup>19</sup>、チュニスで生きた詩人である。カミュは3月5日の「北アフリカの文学」と題の付けられた記事で彼を紹介している。ここから、カミュはアルマン・ギベールを「北アフリカ」の作家として捉えていることが分かるだろう。

カミュは1939年7月15日に再びアルマン・ギベールの作品を取り上げている。『飼いならされた鳥』に関する記事では、カミュは古代世界の神話のイメージを作品の中で読みとっている。

On le voit, l'âme de Plotin à la recherche de sa patrie perdue, l'itinéraire des dieux souffrants, qu'ils soient Orphée ou Dionysos, la quête éperdue d'Isis pleurant à la recherche des membres d'Osiris, ce désir d'unité et cet appel d'amour, ces thèmes éternels de la sensibilité méditerranéenne sont renouvelés dans cet *Oiseau privé*.<sup>20</sup>

彼（鳥刺し）には、失われた祖国を求めるプロティノスの魂が、オルフェウスにせよディオニュソスにせよ苦しむ神々の道程が、泣きながらオシリスの四肢を求める取り乱したイシスの探索を見ることができ、統一したいという欲望や愛への訴えといったこれらの地中海的感性の永遠なる主題が、『飼いならされた鳥』において刷新されているのである。

ここでは、「地中海的感性」を古代の様々な地域の神々の感性から考えていることがわかる。カミュが神話のモチーフを頻繁に使用していることに関してはモニッ

ク・クロシェがすでに論じているが、彼の分析の中心は随筆作品や小説作品であり、新聞記事などの政治的な評論は分析の対象から意図的に外されていた<sup>21</sup>。しかし、神話的なイメージは『アルジェ・レピュブリカン』の記事でも見ることができる。1939年6月5日から15日まで『アルジェ・レピュブリカン』紙に掲載された「カピリアの悲惨」という一連の記事の最初の記事のタイトルも「Le grèce en haillons」「ぼろ着をまとったギリシア人」となっており、カミュが地中海のイメージを古代ギリシアとして捉えていたことがわかる。

しかし、ここではエジプト神話の神とギリシア神話の神が混在しており、地中海に存在する複数の文化が共存している状況が描き出されている。また、刷新という言葉からこうした神話の「再創造」が現代において行われていることにカミュは価値を見出しているのだろう。カミュは「地中海」という現在の場において、古代や現代の様々な文化がそれぞれ存在していることを見ていた。彼にとって「地中海」は様々な地域や時代のもので、神話などのステレオタイプのイメージから連想されるそれぞれの要素として共存していることを理想としていたといえるだろう。

ここでは地域にある固有性や歴史性はややもすると無視されてしまうといえる。しかし、こうしたカミュの地域や歴史への冒流行為は、それぞれのその土地、その時代に固有の文化を全世界規模に開いていくために必要だった作業であるともいえる。彼にとっての「地中海」はそのような全世界規模の文化の共存が行われるような空間であったといえるだろう。「読書サロン」の記事に北アフリカの作家だけでなく、他の国の作家が取り上げられているのも、そのようなカミュの文化戦略のためであり、「読書サロン」の記事空間そのものが、カミュの理想とする文化共存を可能とする「地中海」空間と重なるものだったのであろう。

## 7. おわりに

本論文では、『アルジェ・レピュブリカン』の「読書サロン」に書かれたカミュの言説を通して、カミュが「地中海」をどのように捉えていたかについて考察した。カミュは「地中海」を様々な文化が共存し、相互に影響しあう場として捉えていたが、その共存の在り様は時間や地域を超越したものであった。カミュが理想とした「北アフリカの文学」もそのように様々な文化が複合した新しい文学であったのだろう。カミュは単に過去を否定して新しい文化が「地中海」にあるとは考えておらず、またアルジェリアニスムのように文化の混合を持って新しい文化を創り出そうとしなかった。彼が目指したのは文化の共存、あるいは現在における「再創造」や共存であったのだろう。

このような態度は、アルジェリアや「地中海」の独自性だけを求めるのではなく、普遍的な文化一般を考察する道を開いたとは言えないだろうか。カミュはローカルな文化を考察することで普遍的な文化の在り様を考えようとしたのだ。時代や地域を超越した視点から地域をみつめること、あるいは逆に地域を見つめることによって普遍的な文化を考察すること、「読書サロン」の記事にはこうしたカミュの文化に対する双方向的な視点が見られるとも言えるだろう。

しかし、カミュのこうした論理には曖昧な部分が多い。「新しい文学」や「地中海」といった言葉の意味は曖昧であるし、地域や歴史や政治に対する意識があまりに希薄である。高島正明は「こと政治的判断に関するかぎりでは、カミュをはじめから間違いを冒していたと指摘することはできる。だがそれは、必ずしも作家としての敗北を意味しはしない。「若い地中海」の演説のなかで、すでに彼は政治的国境を意味する祖国を否定していた。彼の祖国は共通な感受性にのみかかわっていたのであり、かかる感受性のすべてに対する優位という事実は、いってみれば、はじめから非政治的な、むしろ文学の領域にかかわる問題にほかならなかった<sup>22</sup>と述べており、カミュの曖昧な態度の原因が、「感受性」の問題と関連していたことがわかる。『読書サロン』におけるカミュの文化観も、理論を越えた感受性に即して読まねばならないところが多々あり、それがカミュの言説を弱くもし、強くもしているのだろう。ローカルな文化と普遍的な文化観の交錯も、このようにカミュにおける感受性での理解でつながっているといえる。

## 注

- 1 同人誌『南』*Sud*の第一号に収録されている。なお、署名はP. Camusになっている。この雑誌『南』は当時カミュが所属していた哲学のクラスの高校生たちが月刊誌として1931年の12月に創刊された。
- 2 「文化の家」は共産党の指導のもと、人民戦線運動の一環として運営されていたものである。カミュは1937年に創立された「文化の家」の事務局長になっている。
- 3 Albert CAMUS, *Œuvres complètes Tome I*, Gallimard, 2006, p.569 (以下カミュの全集は*ŒC*と示す)。なお、本論文中の日本語訳は、既訳が存在する場合はそれを参照しているが、引用の訳文はすべて筆者によるものである。
- 4 Jennifer Brown Herrin, *Nostalgia and identity: Algerian works of the école d'Alger*, Thèse de doctorat, Tulane University, United States, p.62参照。
- 5 1930年代後半にエドモン・シャルロの会社「真の富」*Les vrais richesses*に集まった知識人、芸術家を中心にアルジェリアの文化の在り方を考えた文化運動のことである。カミュも

- 「アルジェ派」の一人として、雑誌の編集などに携わっていた。
- 6 *CEC I*, p.870.
  - 7 Guillaume Laisne, *Engagement d'un quotidien en société coloniale, (1938-1955)*, Mémoire de master de recherche 2<sup>e</sup> année, Histoire, IEP Paris, 2007.
  - 8 カミュをはじめとするこの新聞の編集スタッフは、アルジェリアにおける原住民の生活状態の改善を訴えることによって、原住民の諸権利回復と平等を獲得しようとしていた(高島正明『若き日のカミュ』サンリオ山梨シルクセンター出版部、1971年、53ページを参照)。
  - 9 *Cahiers Albert Camus 3*, p.40.
  - 10 *Ibid.*, p.40.
  - 11 高島正明、前掲書、60ページ。
  - 12 *CEC I*, p.788
  - 13 *CEC I*, p.1391を参照。
  - 14 この一覧はまだ完成したのではなく、出身地や出版年が正確にわからないところに関しては記述していない。なお、全ての情報は筆者がそれぞれ調べたものである。タイトルの訳は特に定訳がないものに関しては、筆者が訳出したものである。
  - 15 Edmond Brua, « Fables dites bônoises », *Œuvres soignées*, Jacques Gandidi, 2002の序文を参照のこと。
  - 16 Edmond Brua, op. cit., p.166.
  - 17 *CEC I*, p.804.
  - 18 *CEC I*, p.804.
  - 19 エドモン・ブルアの生誕地に関する記述について筆者ははっきりとは確認していないが、*Œuvres soignées*の序文の筆者のジョルジュ・ラフリーGeorges LAFFLYと幼いことから親交があった(彼はブリダというアルジェリアの都市の出身である)などの記述からアルジェリア生まれだと推測できる。
  - 20 *CEC I*, p.848.
  - 21 モニック・クロシェ『カミュと神話の哲学』大久保敏彦訳、清水弘文堂、1978年。
  - 22 高島正明、前掲書、54ページ。

## 参考文献

- CAMUS, Albert, *Œuvres complètes Tome1*, Paris, Gallimard, 2006  
CAMUS, Albert, *Œuvres complètes Tome4*, Paris, Gallimard, 2008  
CAMUS, Albert, *Cahiers Albert Camus, Tome 3*, Paris, Gallimard, 1978

Edmond Brua, « Fables dites bônoises », *Œuvres soigies*, Jacques Gandidi, 2002  
GUÉRIN, Jeanyves (ed.), *Dictionnaire Albert Camus*, Paris, Robert Laffont, 2009  
HERRIN, Jennifer Brown, *Nostalgia and identity: Algerian works of the école d'Alger*, Thèse de doctorat, Tulane University, United States, 2001  
LAISNE, Guillaume, *Engagement d'un quotidien en société coloniale, (1938-1955)*, Mémoire de master de recherche 2<sup>e</sup> année, Histoire, IEP Paris, 2007  
クロシェ、モニック 『カミュと神話の哲学』 大久保敏彦訳、清水弘文堂、1978年  
高嶋正明 『若き日のカミュ』 サンリオ山梨シルクセンター出版部、1971年